小 学 校 時 代 （ 春 夏 ）

新学年を迎える毎年の四月の初め、新しい教科書（これが後に苦痛の種になるのだが）の香と共に始業式の講堂でクラス担任の先生の発表を固唾をのんで待つ気持ちは今でも覚えている。というのは、私が通った湯日小学校は各学年一クラスしかなく、クラス替えの楽しみと刺激がなかった。そのため私達の最大で唯一の関心事は担任の先生が替ることであった。教頭先生の発表を聞いて生徒の間から「ええー」とか「あーあ」という落胆の声が一斉にあがり、先生方が苦笑することも度々あった。

そして新茶の季節と共に野山の緑は深みを増し、田植の季節が来る。当時は、田植えと刈入れの時季に各一週間程の「農休み」があった。生徒の家庭は農家が殆んどであったため、家の手伝いをしなさいということである。私の家も農家であったので手伝った。湯日地区は更に五つの地区に分れていて田植えが終ると、それぞれの地区の小学生がそれぞれの地区のお寺などで「学芸会」といって、演劇、歌、おゆうぎ等の出し物を地区の人達に見せる催しをやった。「お百姓さん御苦労さん」ということである。

そして待望の夏が来る。ＰＴＡの人達が湯日地区の中央を流れる湯日川の所々を堰き止めてプールを作ってくれ、各地区の少年団の団長が白旗を立てて川の安全を知らせてくれる。私達は遠くからも見えるこの白旗を見て出かけるのである。夏休みはこのプールで疲れ果てるまで遊び、家に帰って昼寝をした。しかし、夏休みの最後の一週間は地獄だ。宿題や工作やらの課題が多すぎたのか、夏休みの初めに計画を立てるのだが何処でその計画が崩れるのか未だにわからない。毎年判で押したように確実にこの地獄がやってきた。

【平成１５年７月２１日　静岡新聞　夕刊　掲載】